

人文会ニュース

1989. 3

編集長が選んだ'88年わが社の一冊..... 1

〈特集〉八重洲ブックセンターの10年

(株)八重洲ブックセンター 田島幸夫 13

(株)八重洲ブックセンター 小寺慶三 18

図書館流通の問題点

...(株)図書館流通センター 石井 昭 23

人文会復刊書フェア開催に当って

..... 販売企画委員会 竹内康一 34

テリー・イーグルトン

鈴木 聡 訳

ウィトゲンシュタイン、その友N・パフチン、革命家コノリー、そして『ユリシイズ』の主人公ブルーム——実在・架空の四人が織り成す、世界の変革をめぐる思議すべからざる物語。●定価2,400円

クリオの手鏡

平凡社選書128

上村忠男

クローチュからギンズブルクまで——20世紀イタリアにおける異
想史の鉅脈を、アクチュアルな視点からたどる。へ文化の変革への震
源地、イタリアを理解するための必読書。

●予価2,800円

● 外資的企業

東京都千代田区三番町5
千102/振替・東京8-2963
TEL.03-265-0455

平凡社

門は開かれて

らい医の悲願——四十年の道

犀川一夫 沖繩を中心に、らい治療とその人間回復に生涯をささげた医師・キリスト者のライフワークの経路。 二〇〇〇年

災害の襲うとき

カタストロフィの精神医学

ラファエル 台風や地震から原発事故まで、被災者の精神的障害と救済法を豊富なデータにより解明。石丸正訳 300円

バリの親族体系

C・ギアツ他 親族関係を象徴として扱えた新解釈。パリのポリフォニックな文化へ展望を開く。鏡味・吉田訳 580円

ピューリタニズムと近代市民社会

今関恒夫 リチャード・バクスターの思想の実践的意味を歴大な原典に遡って探る。初の本格的バクスター研究。三〇〇円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

法政大学出版社

大学制度の社会史

H. W. プラール 中世～現代に至るヨーロッパ大学史を、教授・学生の生活、試験の実態や就職の問題等について巨細に描く。山本 尤 訳 3500円

都市を読む*イタリア

陣内秀行(執筆者)＝大坂彰(都市の形を著者)と構成し、都市のくらしを歴史的都市の身体によって読みとりつつ、5900円

日本芸能史 6 近世—近代

藝能史研究會編 芸能の中で近代の論理
がいかに芽生えてきたかを追う。2400円

ポール・ニザン

イシャグプール〈知識人の機能の危機〉
作品とその時代を問う、川俣駅／3200円

18世紀ウィーンの民衆劇

原研二「放浪のプルチネッタたち」その
エネルギーを素手でつかみ取る。4800円

東京都千代田区富士見2／☎03-237-1731

望月照彦 都市民俗学①
〔全5巻〕第二回配本

望月照彦 都市民俗学①
〔全5巻Ⅱ第一回配本〕

△都市は未開である▽をライトモチーフに一貫して「文学」の香り漂う街づくりを実践し

へ行こうとするのかという壮大な都市民俗学の原点ともいうべき、人の住まいからの細緻な学の形成。序文Ⅱ上田篤 解題Ⅱ陣内秀信

超市民俗学 定価4500円

続刊

② 街歩き者市 取る 解題 川本三郎	③ 都市の創り方 解題 高田公理
④ 賑わいの文化論 序文 加藤秀俊 解題 上野千鶴子	⑤ 文明の擬態 序文 中野一郎 解題 松岡正剛

東京・文京
小石川3-7

未來社

電話 (03)
814-5521

編集長が選んだ

‘88年わが社の一冊

昨年、各会員社においては、新刊活動を活発に行っていました。その多数の新刊の中から「一冊」を選択することは大変むずかしいことですが、あえて挑戦したのが今回の企画です。なお、選択の基準を統一しておりませんことを、お断わりいたします。（掲載は、社名の五十音順）

Xデー問題と現代天皇制（四六判・八〇〇円）

青木書店 島田 泉

Xデー近しと実感されるようになった昨春、手遅れにならないうちに、歴史家として発言しておいた方がよいのではなからうかと、歴研委員の数人と話し合った。小社は近現代史なかでも天皇と十五年戦争とを編集企画の一つの柱としてきた。その時期『十五年戦争史』（全四巻）の発刊が間近かにせまって余裕がなくなためらいはあったが、前年秋の天皇手術をめぐる報道合戦や、マスメディアで進むXデー準備態勢を見て、虚偽と歪曲に満ちた大キャンペーンが予測されたから、現代天皇制の特質と役割に関する歴史学研究成果を広く知らせることが必要だと考えた。幸い歴研ばかりでなく日本史研究会・歴教協・歴科協も参加し、編集面ばかりでなく普及への協力態勢も整い、八月初めハンディな小冊子風の本書ができあがった。まさに絶好のタイミングだったといえよう。今回の事態に際し科学的で冷静な判断をするために少しは寄与できたのではと自負している。とくに歴研委員が苦心してまとめたQ&Aが読者に好評だった。

ベトナム戦争の記録（A4判・二二〇〇円）

大月書店 佐保 勲

昨年末ぎりぎりにやっとの思いで発行にこぎつけた『ベトナム戦争の記録』は、幸い大きな反響で、二刷りの出来を待たずに、三刷りにかかっています（累計一万部）。ベトナム戦争については、これまでいくつかの企画がありましたが、なかなかうまく実りませんでした。「いまごろなぜ？」という感覚を乗り越えることが自分たち自身にとってもむずかしかったのです。今回の企画は、あの戦争は日本にとって、そしてわれわれひとりひとりとって、なんだったのかをもう一度問い直そう、というものです。思い切って本格的な取組みにしましたが、企画に熱中していくなかで前述の「？」は完全に吹きとんでいきました。いわゆるベトナム世代のたんなるノスタルジアではなく、現在の視点で編集を貫いたことがよかったと思っています。アジア・太平洋の時代という言葉が目につくこのごろですが、ベトナム戦争の意味は今後ますます重みを持ってくるでしょうし、またそうなくてはならないと、思っています。

澤 昌利著

天皇の軍隊 わが在隊記 (A5判・二九〇〇円)

御茶の水書房 橋本盛作

大正十五年十二月二十五日、二十五歳で皇位を継承して以来、二万二千六百六十日、史上最長の在位期間を記録し、摂政の四年間を含めると、実に六十七年以上に亘って日本の頂点に位置した天皇が一月七日死去した。昭和時代の反省と評価は、今後われわれが是非とりあげなければならぬ大きなテーマである。

小社は昨年『天皇の軍隊 わが在隊記』を刊行した。これは一昨年刊行した『日本人よ、侵略の歴史を忘れるな―旧日本軍一兵士の記録と回想』(現在三刷)の続編である。

「天皇陛下の御為に死ぬこと」が、皇民教育の要諦であり、「滅私奉公」が「国民道徳」となり、民主主義的諸権利は保証されず、言論や思想の自由もない「臣民・皇民」から強制徴兵で作りに上げたのが「皇軍」であることを著者が、当時の日記をもとに執筆したものである。本書は、今日も思っている「皇軍」思想を見極め、残酷な戦争と軍隊を告発した貴重な記録でもある。

トーマス・マン著／森川俊夫訳

トーマス・マン日記 一九三五一三六 (四六判 八〇〇〇円)

紀伊國屋書店出版部 荒木好文

思想的深さ、識見の高さ、磨かれた言語表現、堅牢無比の構成などで二十世紀ドイツ文学の最高峰と目されるトーマス・マン。そのマンが生涯克明な日記を書き続けたことはよく知られています。しかし二度にわたってマンはこの日記を破棄し、残されたのは一九一八―一九二一、一九三三―一九四五をカバーする八巻だけです。

この日記を、いかなる訂正も加えず、そのままの形で忠実に訳出したのが本書です。この一九三五一三六の巻では亡命生活の日常、小説執筆中の経過、ヒトラーや当時の各国の動きなどが詳細に描かれていて、貴重なドキュメントにもなっています。

八千円を越える高い値段ですが、すでに第一巻配本の三三―三四の巻は重版を行い、この三五―三六の巻も好評です。

まだ原書は全八巻が出版されていませんが、熱心な大勢のファンに應えるためにも、二年に一冊の割で出版して行きたいと考えております。

岩男寿美子・萩原 滋著

日本で学ぶ留学生（A5判・二八〇〇円）

— 社会心理学的分析

勁草書房 石橋雄二

「日本語を理解し話せるようになると、反日的意識が強くなる」というショッキングな調査結果にわれわれは何を読み取ればよいのか。

国際化の進行の中で、外国人留学生問題への関心が高まり、年々その数は増加し、いまや二万三千人に達しようとしている。その八〇％はアジア系留学生である。彼らの留学の目的は？ いかな体験を持ったか？ 帰国後の評価は？

一九七五年〜八六年にかけて、留学生に面接し、社会心理学者の眼を通し、体系的に留学問題を考察し、浮かび上がる留学生の生活と意識の実態に眼を向け、わが国の留学制度の在り方とよりよき留学生受け入れへの提言を行った。

二一世紀に向けて日本の社会を豊かにするという認識の下に留学生問題を根本的に掘下げた書である。

レフ・ワレサ著／筑紫哲也他訳

ワレサ自伝 希望への道（四六判・二八〇〇円）

社会思想社 田中盛人

敗戦国日本は経済大国となり、一方、戦勝国であったはずのポーランドは対外債務に悩まされ、インフレが昂進している。戦後四〇年は、ある意味で登りつめたものと産みの苦しみをかかえるものとを分つ時代だった。

八〇年夏、独立自主労組「連帯」が目ざしたものは、まず経済改革と労働条件の改善だったが、その根っ子には人びとの自主性と個性を尊重する社会の実現という「世直し」の思想があった。そしてこの運動の源流にはポーランドの歴史を世代を超えて継承していこうとする意志があったのである。戒厳令によっても、いまだ当局の策動にさらされても、「連帯」の理想がゆるがないのは、自らが「歴史」を作りつつあるとの自信による。

ワレサの個性、「連帯」のもつ懐の深さを本書はよく語っているが、いま読まれるべきは、彼我の歴史の尺度についてではなからうか。

中村 元著

インド人の思惟方法（四六判・三〇〇〇円）

春秋社 小関 直

いま時代は大きく変貌をとげようとしている。東洋の宗教と文化がさまざまなかたちで注目をあびているのもそのひとつの現われといつてよいだろう。

決定版中村元選集（全四三巻）は、そのような状況をふまえ、全く新たな構想と編集のもとに、インド思想・仏教思想・比較思想の三つの柱を中心に、博士の偉業を結集し、東洋の叡知を存分に示そうとの選集である。

本書は、その第一巻。東洋人が何をどのように考えてきたかをテーマとする「東洋人の思惟方法」（全四巻）の一冊である。神秘と永遠の国インド、その特有の思惟方法とはどのようなものか。インド的なものとは何かそれらが本書によって、十全に示されるのである。なお他にこのシリーズには、シナ人、チベット人、韓国人、そして日本人と並ぶ。いずれも興味深いものだ。

東洋人のみならず、世界や人間それ自体に興味と関心を有する人には、格好の書物であろう。来たるべき時代にむけて、魅力あふれるこの一冊を読者に提示したい。

古川 ロッパ著／滝 大作監

古川 ロッパ昭和日記 戦後篇（菊判・二二〇〇円）

晶文社 津野海太郎

旧知の演出家・滝大作さんから、古川 ロッパさんの日記を晶文社で本にできないかという話をうけて、「やってみよう」とすぐに思った。

滝さんにつれられて帝劇地下の喫茶室におもむき、ロッパ氏の御息で、東宝プロデューサーの清氏に日記の一部を見せていただいた。当用日記や大学ノートが十冊ほど、ていねいな細字でびっしり埋まっている。それを見た瞬間、これはぜひわれわれで本にするぞと心が決まった。書名を『古川 ロッパ昭和日記』とし、戦前・戦中・戦後の三巻立てにするプランも、ほとんどその時にできてしまっていた。

あとは膨大な日記をどうやって三巻本にまとめるかだ。その仕事に多忙な滝さんが当たってくださった。日記に注ぐロッパさんの情熱もすごいが、それを校訂する滝さんの仕事ぶりにも超人的なものがあつた。最終的には「晩年篇」を加えて四巻にせざるをえなかったが、昭和の日本人の記録として希有なものができたと信じている。

アラン・パッドリー著／川幡政道訳

カラー図説 記憶力（B5判・三八〇〇円）

——そのしくみとはたらき

誠信書房 石川誠一郎

『記憶力』は専門書ではない、カラー写真がふんだんに入った一般向けの本である（『週刊朝日』）。人間の記憶は、はかり知れないものであり、また限界のあるものである。そのシステムは、容量、柔軟性、スピードの点で最新のコンピュータを凌ぐ性能をもっている。同時に、ダイヤルを回しているうちに九桁の電話番号を忘れてしまうような、容量に限界のある信頼性に欠けたシステムである。著者はロンドン大学で心理学を専攻。米國で修士号を取得後イギリスへ戻り、本書でも紹介されている郵便コードの作成に取り組み、一九六三年ケンブリッジ大学で博士号を取得した。その後同大学医学研究所の応用心理学部門主任教授に迎えられ、八三年に英国実験心理学会会長になった人である。目撃証言や記憶の病理など一般の読者にも関心のある内容が数多く紹介されており、豊富に用いられたカラー写真やイラストは本文の理解を助けるばかりでなく、見ているだけでも楽しめよう。ぜひ記憶にとどめていただきたい一書である。

梅棹忠夫編

日本文明77の鍵（四六判・一三〇〇円）

創元社 猪口教行

国立民族学博物館長梅棹忠夫編によ日本文明論。

群島、土器、貝塚、米の経済、京都、漢字、神道、武士、将軍、黒船等からテレビ、カメラ、自動車、高度経済成長、情報といった七七の項目を立て、日本史の流れに沿いながら、日本史とはひとあじ違う日本文明史を綴る。例えば縄文土器を語りながら現代のセラミックに言及し、貝塚を語りながら現代日本人の魚食や水産業を語る。なるほど現代日本を解くキーワードがうまく集められ、鮮やかに簡潔に説明される。まさに腕のよい料理人による見事な一品料理が並ぶ。執筆陣は編者のほか小山修三、谷直樹、守屋毅、園田英弘、米山俊直。

最大のポイントは、我々とはとすれば、明治以後、初めて文明国の仲間入りをしたと思いがちだが、決してそうではなく、明治革命（と本書は呼ぶ）以前から、日本は西洋文明と無関係に、また中国文明とも違った独自の日本文明というものを、西洋文明とパラレルな軌跡を描きつつ、極東で発展させてきたという観点である。

阿部謹也著

自分のなかに歴史をよむ (B6判・九五〇円)

(ちくまプリマーブックス15)

筑摩書房 土器屋泰子

「山代巴さんの『因われの女たち』全十巻が完成したとき、私は径書房の依頼で一読者としての感想を述べたことがあった。そのとき私の話を聴いていたのが筑摩書房の土器屋泰子さんである。土器屋さんは早速研究室に私を訪ね、二つの宇宙の話を筑摩のプリマーブックスに書きおろすようすめられたのである。全く思いがけない申し出ではあったが、考えてみれば中学生や高校生に『歴史とは何か』というテーマで語る機会はそう多くはない。この機会に私に出来るかどうかは解らないが、やってみようという気になって引受けたのである。」

これは『自分のなかに歴史をよむ』の半年ほど前に刊行された、『中世賤民の宇宙』のあとがきの一部です。このあとに、プリマーブックスをすすめる過程でこの評論集が生まれた、と著者は書かれています。プリマーブックスをお願いにあがったいきさつも、これにつきまします。お原稿をいただきながら、いちばん最初の読者であるしあわせを、この時ほど感じたことはありません。

稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編

教師のライフコース (四六判・二六〇〇円)

—昭和史を教師として生きて

東京大学出版会 渡辺 勲

天皇の死で「昭和」は終わった。歴史の営みは彼の死とは無関係に時を刻むが、一つの「時代」の終焉を「自分史」の問題として、万感の思いで受けとめた人々がいたことも事実であろう。「満州事変」勃発の年に、長野県師範学校を卒業して教職の道を歩み始めた七一名の先生方(本書の主人公)も、そのような人々であったに違いない。さて本書の背景には、「教師の専門的力量とは何か? その力量は、いつ、どこで、どのように獲得されてゆくのか?」をテーマとして行われた、徹底したアンケート調査と膨大な時間を要した聞き取り調査がある。

今日の教育現場から提起された問題群を、あの「昭和史」を教師として生きた人々の思いを横軸に配した本書は、一二名の執筆者による共同の仕事でありながら、文字通り見事に編まれている。世に、某々「編」の本はあまたあるが、なるほど「編者の役割」とはかくあるべきか、と思わせてくれる本書は、教師必読と共に出版人必見を訴えたくなる、「小さな大作」と言えよう。

大津定美著

現代ソ連の労働市場（A5判・四八〇〇円）

日本評論社 金田 功

「社会主義」という言葉のもつイメージが負の価値を帯びてからすでに久しい。このことを決定的にしたのは中越戦争とソ連軍のアフガン侵入であろう。

このことがストレートに反映してか、わが業界でも、「悪の帝国」ソ連といった毒々しいタイトルを冠したものの以外、社会主義やソ連に関する出版物は全く売れなくなってしまった。そればかりか、日本の学界ではソ連研究者の再生産さえ困難になっているという。こんな状況のなかで、本書のような研究書を出すことには正直いつて二の足を踏んだ。ゴルバチョフのペレストロイカが本物でなければ、とても出せなかったに違いない。

統計が公表されていないため推計に基づく数値が並んでいるが、本書の「主人公」は労働者国家ソ連の勤労者たちである。彼らの姿に、いまやまぎれもない経済大国となった日本の勤労者との違いとともに、多くの共通点を見出すことは困難ではなからう。

西平直喜・久世敏雄編

青年心理学ハンドブック（A5判・一八〇〇〇円）

福村出版 西尾 孝

「元気で、明るい」現代の青年たち。しかし、そのイメージとは裏腹に、彼らは内面でさまざまな問題を抱えている。一方、おとなたちは、彼らをどう理解し援助していけばよいのか、家庭・学校・職場でその対応に苦慮している。

本書は、この両者の架橋を願い、心理学、教育学、精神医学の第一線の専門家五十八人を執筆者に迎え、あらゆる角度から現代の青年像に接近しようとする。

全体は三部にわかれ、Ⅰ部では青年心理学説を広く展望し、Ⅱ部では最新のデータから「青年性」そのものを検討し、Ⅲ部ではこの青年性が現代の日本社会でどのようにあらわれ阻害されているかを「世代性」として描くとともに、具体的な援助法を実践的視点からとらえる。

学会が到達した先端の研究成果に基づき、中学生から二十台までの多感で不安定な時期にある彼らのトータルな理解と適切な指導の指針を示す、わが国初の青年心理学研究のハンドブックである。

横井 清著

のと胞衣 (A5変型・二〇〇円)

平凡社 龍沢 武

是非ふれておきたいのは、視点を固定せず、随所に「私」を入りさせる破格の文体。『的』にこだわりながら私は皆様を道連れにして右往左往するのみでした。何かが見え始めたようでもあり、せっかく見えていたものが陰を薄めたようでもあります。たとえば、狩猟や騎射の意味を中世人の感性の次元でとらえる興味深い考証から、さらに「殺生」や「武芸」の陰で働いた河原者の問題へと展開するその結節点に置かれた文章が、これである。起承転結を意識的に破壊していくこうした文体に、断片的な事実から歴史をなканずく賤民史を、現代人に感知しうるものとして立ち上がらせようとする著者の苦心がある。歴史はいつも発端・展開・結末という現代人向きの構造を備えているわけではない。紋切り型の客観的叙述や流行のメロドラマ的な自分史が、過去に赴こうとする想像力を結局口当りのいい物語に閉じ込めてしまうのになんとして、著者は過去とのより複雑な対話に近づこうとする。歴史叙述のあり方を考えさせる一冊。

陣内秀信著 (協力・大阪彰)

都市を読む・イタリア (A5判・五九〇〇円)

法政大学出版局 稲 義人

『都市のルネサンス』によって衝撃的にデビューした著者は、『東京の空間人類学』や『私の東京学』によって、いわゆる「東京学」の火付け役の一人ともなったが、その発想の背後にはつねにイタリアの都市と建築があった。イタリアが著者を生んだとさえいえるだろう。

その著者によるイタリア都市論の集大成が本書である。第I篇は、徹底したフィールド・ワークによる都市構造の歴史的分析であるが、著者自身「手づくりの価値あるシリーズ」と自負するように、その作業の中から、さまざまな時代の都市の姿が鮮やかに浮かびあがってくる。

第II篇以降は、著者のイタリアでの生活体験から生みだされた都市論である。したがって、非機能的な「遅れた」都市の魅力を語っても、それは旅人の感傷や老人の追憶とは異なり、都市の再生や歴史的建築の保存を語っても、生活者を無視した空論とはならないのである。

読者もまた本書を手がかりに、読者自身の住む「町」や「地域」を読む方法を身につけてほしい。

アラン・ブルーム著／菅野盾樹訳

アメリカン・マインドの終焉（A5判・二五〇〇円）

みず書房 加藤敬事

価値の多様化が言われる。しかし、それは実は価値喪失の相対主義の同義語ではなからうか。逆説的なようだが、批判精神ぬきに「それぞれのライフスタイルがあるのだから」と言うとき、人間は他者への関心も、お互いどうしの絆も失っていく。著者は、七〇年代以降のアメリカ衰退の真の原因を、ほんらい開かれてあるべき精神のそうした自己閉塞状況に求めている。ウォークマンを耳にして独りロックミュージックに酔いしれる若者の姿は、その一つの象徴でもあろうか、このアパシー・シンδροームに冒された若者で占められた大学のキャンパスから、現代のプラトニストともいべき教授は、ニーチェ、フロイト、ウェーバーの語彙すら、アメリカン・イングリッシュの俗語と化していく文明の運命を見すえている。その運命は、ジーンズが世界にあまねく普遍化したように、われわれ自身のものに他ならない。苦い真実に閉ざされがちな目を開かせ、心をかき乱さずにはおかない圧倒的な力をもった書物である。

宮内美沙子著

ナースキャップは「ききみみずきん」（四六判・一五〇〇円）

——看護の現場から

未来社 田口英治

小社の著者の一人のS氏の奥さんは看護婦さんである。お宅に招待され奥さんから日本の看護、医療の現状などお話をうかがった。私一人できいているだけではもったいない大切なことだったので、小社の雑誌『未来』に執筆をお願いした。文章を書いたことがないから、と渋る奥さんにやっと承知してもらった。こうして『未来』に『看護病棟日記』の連載が始まった。宮内美沙子さんの誕生である。ヒトゴトでない内容のゆえだろうか、読者からの反響は大きかった。これは後に一本にまとめられたが、『ナースキャップは「ききみみずきん」』は二作目である。木下順二さんの『ききみみずきん』では、藤六がこの頭巾をかぶると小鳥たちのことばが聞こえるのだが、看護婦には黙しがちの患者たちの心の奥深くの声やうめきが聞きとれているのだろうか、と宮内さんは自らに問う。前著と同様に多くの人に読みつがれている。宮内さんには日常の勤務の他に執筆・講演と超多忙にさせ申しわけないが、一層がんばってほしいと願っている。

所 功 著

年号の歴史 (A5判・三〇〇円)

雄山閣出版 芳賀章内

松尾芭蕉の俳論を示すものとして「不易流行」という有名な言葉がある。不易は本質を意味し永遠につながる。流行はブームを意味し、現実的であり消滅する性格をもっている。専門書は前者に属するのは、研究者のテーマが、ややもすれば一生を賭すことになるからである。したがって研究者にとってはブームをあてにすることはなかなかできない。しかし専門出版社としても「不易」と「流行」が一致するのは何よりも望ましいということになる。昨年のはなかで、多分にこれに近い現象を呈したのが『年号の歴史』である。中国における年号の発生から日本の年号とのかかわり、中国・日本の年号の内容の分析から文字構成・選定法、今日の元号法の成立まで、細部に涉って詳細に論述された、堂々たる論文である。朝日、産経などこぞって専らこれをもって解説した。著者は天皇崩御の際は、NHKの元号解説者となった。著者の長い労苦が酬れたということであつたし、私は複雑な心境であつた。

松橋晴俊・長谷川公一・畠中宗一・梶田孝道著

高速文明の地域問題 (四六判・一七〇〇円)

——東北新幹線の建設・紛争と社会的影響

有斐閣 平川幸雄

現代の高速文明は地域社会をどう変え、日本の国土全体をどう再編しているか。われわれの日常生活は、それによってどのような変容をこうむるか。

著者たちは、全国総合開発計画のなかに高速交通ネットワークを位置づけるとともに、東北・上越新幹線の建設とそれをめぐる地域紛争の具体的分析を軸に、大規模プロジェクトのもたらす地域変動の問題に取り組んだ。四全総の策定(一九八七)を契機に、新幹線網だけでなく高速道路網の建設、空港の大型化など交通・情報のネットワーク化は、ますます強力に推し進められている。

本書は、東北新幹線に焦点を合わせ、その新幹線の建設・紛争とその社会的影響をトータルにとらえる試みである。今日の高速交通ネットワークが引き起こす地域社会の変容、ひいては国土全体の再編というホットな社会問題に挑戦した、気鋭の社会学者たちの長年にわたる共同研究の成果である。

目崎徳衛著

数奇と無常（四六判・一八〇〇円）

吉川弘文館 山田 亨

著者の西行研究は名著『西行の思想的探究』刊行以来なお十年に及び、その間に書き留められた論考を集成した本書は、その人物と思想の根元を究めようとして意欲的である。西行については、古来多くの人が語ってきた。しかし、数多い西行関係書の中で歴史家による書は少ない。著者は史家としての透徹した眼で西行研究を続けてきた第一人者である。

西行における数奇と無常とは何か、北面の武士であった西行出家の理由は未だに謎に包まれている。その無常観は現代人の心に何故魅するものがあるのだろうか、惹かれる要素は何か。中面の混濁した社会と現代と共通するものを感じ、西行の生き方に深い関心を寄せ、また彼を愛する人は多い。西行は日本人にとって興味尽きない永遠の人物ともいえる。著者は詩・歌・法語などを引用して多方面から西行を説明している。なお本書は、造本、装幀面についても十分に検討、意を用いたので魅力ある書になった。読書子に自信をもって薦める一冊である。



△特集▽ 八重洲ブックセンターの十年 ①

八重洲ブックセンターの十年の歩み

（株）八重洲ブックセンター
代表取締役専務

田島 幸夫

すぐれた人文書の普及と販売を目的として結成された「人文会」が二十周年を迎えられた。これを機に『人文科学の現在』という知の最先端を捕えた論文と基本的かつ実践的なブックリストが収められた労作も出版された。専門書、人文書に対して継続して努力を払われておられることに対し敬意を表すとともに、専門書の販売に力を注いでいる八重洲ブックセンターとしても心強くあり、うれしかぎりである。

二十周年には及ばないが、八重洲ブックセンターも昨年九月に十周年を迎えることができた。この十周年を支

えてくださったお客様、出版界の方々に対する感謝として、連続サイン会・長谷川潔展等のイベントを行い、功裏に終了することができた。同時に「欲しい本が何でも手に入るような書店をめざす」という創業の理念をふまえて、今後ともお客様のご期待に添えるような書店づくりを目指していることを新聞広告で訴えた。当店が開店以来十年間お客様の支持を得られたのは、この理念を追求し実践してきた結果に他ならない。大げさにいえば、当店の十年間は、読者指向の専門店が成り立ちかつ成功しうることの証左であるといういささかの自負もある。

私共八重洲ブックセンターは、鹿島建設の会長であった故鹿島守之助博士の文化的理念と遺志により創設された。博士は外交官・学者・経営者・政治家と多くの分野で活躍したが、大変な読書家でもあった。読者として「どんな本でもすぐ手に入るような書店が欲しい」という願いを持つと同時に、著述家としても「十年、二十年という歳月をかけた学者の労作が書店の棚に並べられもせず取次店へ送り返されて、ハイ売れませんでした」と片付けられてしまう出版界に疑問を持ち憤りを感じ、何でもすぐ手に入る書店をつくることに思いついた。

最初は地下一階を劇場として一階から八階までを全部書店とする誠に大きな構想で準備していたが、一九七三年のオイルショックとかさなり建築資材の高騰・不足により請負った工事が遅れるという事態を招いてしまった。お客様の工事が遅れているのに、自社の工事を優先させる訳にはゆかない。このような事情からこの計画は一時中断されてしまう。残念なことにこの文化的な事業の結果を待たずに鹿島博士は七十五年十二月亡くなられた。

その後鹿島博士の遺志を継ぎ夢を実現すべく七十七年六月八重洲ブックセンターを設立し、超大型書店の計画に

着手した。建物を建築しはじめた頃から、出版界のみならずマスコミまでがこれを取り上げ、八重洲ブックセンターの開店をめぐる全国的に大変なセンセーションをまきおこした。それから一年の間、全国の書店から超大型店の出店は中小書店の経営を圧迫すると猛反対を受けた。八重洲ブックセンター設立の目的は専門書・学術書等一般の書店で取り扱わない本を取り扱いお客様のニーズに応えようとするものであり、一般書店の品揃えと競合する部分は極めて少ないが、両者の和解はなかなか成立しなかった。注文した本がなかなか手もとにこない、それ以前に注文をうけたがらないという流通のネックや、専門書を取り扱う書店が少ないという品揃えのネックのためかえって八重洲ブックセンターの出店に対する読者の支持は高かったが、紛糾に紛糾を重ねマスコミをにぎわし国会でも取り上げられた。売場面積を当初の計画の半分の七五〇坪にすること、週刊誌・コミック・文庫等の他店と競合する商品は商品構成に加えないことにより、ようやく合意を取り付けることができた。我々はこうした産みの苦しみの中で、読者志向という会社設立の理念を一層強固なものとした。つまり、反対により開店が半

年遅れる間に、我々は鹿島博士の理念を実現する方法・経営戦略をじっくり考えることができた。

もう一つ幸いしたのは反対運動をマスコミが取り上げ、全国津々浦々にまで八重洲ブックセンターの開店が報道されたことである。この報道によりかえって当店の理念・目的というものを広く知らしめることができ、多くの読者の支援を受けることができたのである。

クレイグ・R・ヒックマンとマイケル・A・シルヴァの『エクセレント・カンパニーを創る』という本の中では「経営戦略」と「企業文化」の強い融合が優良企業の第一条件であると述べられている。出店が遅れるなかで図らずも当店は読者志向というコンセプトで「企業文化」

を形成するとともに、専門書を主力にして読者のニーズを満たすという「経営戦略」を確立することができた。

専門書店として店づくりをするにあたって、特に品揃えには留意した。一般書店にはない専門書を品揃えするために、常備出品をお願いする場合にも一般に出ないものをお願いした。また棚づくりでいえば、平台からではなく棚から本が売れるような棚構成をめざした。人文書の棚づくりとしてはオーソドックスな歴史的な流れにそっているが、現代思想については「フランクフルト学派」「ロシア・フォルマリズム」等現代の思想状況をフォローするよう棚構成した。また、ビジネス街という立地からビジネスマンの関心の高い東洋思想にも力を入れた。

新しいデザインの
日本編年史

年表 日本歴史

全6巻

編集 井上光貞・
児玉幸多・林屋辰三郎

●初の江戸地域史総合年表 ⑤ 江戸後期

(1716
—
1867)

編集・執筆 村井益男・森谷勉久 享保改革から
王政復古まで。画期的な近世総合地方史年表、第
四巻と合わせて全2冊完結。第5回・3800円

既刊 ①原始▼飛鳥・奈良
②平安 ③鎌倉・室町・戦国
④安土桃山・江戸前期
定価2800円・3600円
出典明示●注による解説●
図版多数(カラー32頁)●巻
末読史便覧●索引付

筑摩書房

東京神田小川町2

このような状況の中で一九七八年九月十八日八重洲ブックセンターはオープンにこぎつけることができた。幸い多くのお客様の支持をいただくことができた。また、報道機関がこぞって当店の誕生を取り上げたこともあり一日数万人のお客様のご来店をいただき盛況が続いたが、これは我々の予想をはるかに超えた。開店当初社員の七五％は書店未経験者で、そのほとんどが社会経験もない新卒者だった。このような繁忙の中で社員は店頭での販売・接客技術の不足を誠意と熱意で補い仕事に従事したが、固有技術の不足はいかんともしがたく、せっかく遠方よりご来店下さったお客様を落胆させるようなことも多々発生した。他店にないような本を揃えた専門書店をめざしながら、日々の繁忙の中で販売員としての固有技術や専門知識を備えた社員を育てることは至難の技だった。

そこで創業時の活力を永続させ会社の固有技術・各自の業務力量を向上させるためにTQCを導入した。ここで全社的な品質管理活動であるTQC (Total Quality Control) について詳細を述べる余裕はないので、ファイゲンバウムのTQCの定義をご紹介します。

「TQCとは消費者を完全に満足させることを考慮して、もっとも経済的な水準で生産し、サービスできるように組織内の各グループが品質の開発・維持・改良の努力を総合するための効果的なシステムである」。

そのためにマーケティング・生産・検査・出荷までの全部門がQCを実施する必要があると述べている。米国の技術者中心のTQCから、日本ではさらに営業部門も含めた全部門に、また社長から社員全員によるQCとしてTQCがとらえられている。文字どおり全社的な品質管理活動でCWWC (Company Wide QC) とも呼ばれる。

QCサークル活動はこの全社的な品質管理活動であるTQCの一環として行われ、自主的に自己啓発・相互啓発を行ないQC手法を活用して職場の管理、改善を行う。つまり、単なる改善活動ではなく手法的な裏づけがあることが特徴である。QC手法の基本は統計学である。統計で商売ができるか、人文書が売れるかという疑問は当然であるが、TQCの基本的な思想はファイゲンバウムの定義にもあるように「消費者を完全に満足させること」である。QC活動を通じて「顧客志向」という考え方が

一層強く身についたように思う。

実際には理論武装してからTQCをはじめたのではなく、一九七八年一〇月にまずQCサークル活動を開始し、七九年一二月にTQCに移行した。伝統もなく組織も確立せず、日常業務も模索しながらすすめている段階でどのように店を運営したら良いかということをQCを通じて構築した。日常業務とQCがなかなかうまくかみあわない、QCのために日常業務が滞ってしまうなどとよくいわれるが、八重洲ブックセンターではこのような導入の経緯からQCと日常業務が一体化しうまくいっている。今では方針管理も定着し、TQCは会社の経営管理の中心核となっている。

お客様や業界の方々に支えられて八重洲ブックセンターは十周年をむかえることができたが、今後は専門書店として専門書を販売できる書店員を養成できるかどうかがお客様に受けいれられるかどうかの鍵になるように思う。八重洲ブックセンターが開店する前の会合の席である出版社の方に「八重洲ブックセンターは素人ばかりで、あ

れだけ大きな店をどうやってやってゆくのか」と質問されたことがある。その胸を刺されるような鋭い質問に、私は「書店業界に対し読者が抱いている不満を解消することを目的として運営する」とお答えした記憶がある。今でもこの答えは当を得ているように思う。読者の書店に対する不満は、

① 欲しい本が書店にない

② 注文した本がなかなか手に人らない

③ 店員に商品知識がない

の三つに集約されるという。お客様のニーズにあった品揃えやサービスをするにも、その基礎になるのは商品知識である。書店が次々にスクラップ&ビルドされているうちに書店員の技量というものがいつのまにかスポイルされてしまった。専門書売るにも書店にはその技量がないというのではあまりにも情ない。しかしながら、読者が書店に対して不満を持つということは、同時にまだ期待があるということである。読者にあきらめられないうちに書店のボトルネックを解消すべく努力を続けたい。

△特集▽八重洲ブックセンターの十年 ②

八重洲ブックセンターにおける人文書の十年

編集 八重洲ブックセンター
販売部 販売課 課長

小寺 慶三

八重洲ブックセンターは昨年九月十周年を迎えた。

「欲しい本が手に入らない」という読者の不満、「永年かかり著した折角の本が店頭に並ばない」という著者の不満を解消することを目的とし、「欲しい本がいつでも手に入る店」をキャッチフレーズに店を運営してきた。

活字離れ、本離れが云々されているなか、十年間業績の方もまことに順調に推移している。十年一昔といわれるように一つの大きな節目を迎え、人文書を通して八重洲ブックセンターの変遷を振り返ってみたい。

一 八重洲ブックセンターのオープン

十年前の出版業界は空前の出版洪水の時期に入り、その中で返品率は三十〜四十%と非常にきびしい状況にあった。特に人文書に対しての書店の対応は厳しく、棚の減少・常備品の減数等と読者の目にふれる機会が少なくなっていた。

(一) 八重洲ブックセンターの概要

開店時の八重洲ブックセンターは地下一階から四階までが売場として構成され、坪数七五〇坪、点数二十万点

冊数百万冊。商品構成は

。地下一階 児童書・学参・辞典・文庫（一部）

。一階 新刊・文学・雑誌・読書相談コーナー

。二階 人文・社会・政府刊行物・語学教材

。三階 自然科学・理工学・語学

。四階 美術・芸術・古典・読書ロビー

となっていた。定休日は日曜日（祝日営業）、営業時間は午前十時～午後七時である。

昭和六十一年書店組合の商品規制も全面的に解除され、文庫・雑誌もすべて取り扱えることとなった。昭和六十年九月「文庫の宝島」を五階にオープンし、文庫・新書の全点展示をした。特に一般の文庫以外の人文・社会科学の文庫の売上比率が高く予想以上の反響を呼んだ。また荻窪ルミネ店を五十六年、大丸東京店を五十九年に開店し現在に至っている。

(二) 専門書店としての八重洲ブックセンター

出店時に書店組合の商品規制により、専門書店として歩みはじめたが、これは当初より専門書中心の経営を考えていた八重洲ブックセンターにとっては何れも幸いし、商品知識の会得、業務量においてもそのジャンルに集中

できるようになった。

このような背景の中でオープンしたが、開店後六日目の二十三日（秋分の日）には、陳列する本が間に合わず閉店時間をやむなく一時間繰り上げた。売上の内容を分析したところ、新刊、ロングセラーもさることながら、品揃えの主体を専門書に絞ったのが功を奏したことがわかった。特に二階の人文・社会科学書、三階の理工書、四階の豪華本等販売量に補充がこと欠く状態であった。中でも人文社会の一般書店に陳列していない売れ足の遅い専門書の売れ方は驚異そのものであった。いかに読者が専門書に飢えていたかが証明された。

二 人文書の販売

(一) 人文書に対する基本的考え方

まず人文書の棚構成について触れてみたい。八重洲ブックセンターの人文書は残念ながら同一フロアー内にまとめる事が出来なかった。二階に哲学・思想・歴史・社会、三階に心理・宗教・教育と二つのフロアーに跨っている。これは人文・社会科学の分野の出版物が非常に多く、開店当初の止むを得ない対策であり、必ずしも満足するも

AD
のではなかった。当初顧客の若干の戸惑いがあったものの
の全点展示というメリットで比較的早期に解消出来た。
しかしながら今日でも初めてご来店なさる顧客も数多く、
多層階の書店の悩みとはいえ、今後検討の余地は十分に
ある。

このような問題点はあるものの商品量においては、少
なくとも人文会に所属する出版社の常備においては大部
分を選択させて頂いている。当然の如く全てを陳列出来
るものではないが読者からの問い名せの際は、すぐに対
応できる態勢だけはつくっておきたい。

(二) 商品構成の変化

(a) 揺籃期 素人集団として開店。商品知識のなさに
忙しさも手伝い、一点一点に目がゆき届かず棚はランダ
ムな陳列となった。傍目にはけっして評価出来るものでは
なかった。読者の方にもご迷惑をお掛けしたと思う。

(b) 成長期 中分類・小分類の充実を計る 開店から約
半年店内もいくらか落ち着いて社員も各自の棚構成を考
える余裕が若干出来るようになった。その中で哲学・思
想においては、内容別構成を採用しなおかつ人別を中心
として構成を計った。歴史においては、地理と歴史に分

けそれぞれを日本と外国に分けた。また地理においては
地域別・都道府県別に分類し、歴史においては日本と外
国をそれぞれ時代別に区分、全集・著作集・女性史・人
物史はそれぞれ独立させた。教育においては、各科別と
ジャンル別を、心理については人別とジャンル別を併用
している。宗教は宗派別を用いており現在に至るまで大
幅な変更はない。

(c) フェア・ミニコーナーの展開 八重洲ブックセン
ターにおいては読者に情報提供の場を与えるべく各フロ
アのジャンル毎に、その時々に応じた企画を行うよう
心掛けてきた。その結果を棚に生かす事によって棚にテ
ーマが生まれる。

八重洲ブックセンター開店以来実施された主な人文関
係のフェアを紹介しておきたい。

- ・昭和五十四年 梅原猛先生講演会
- ・昭和五十五年 精神世界への誘い
- ・同年 信仰と思索と心を求めて
- ・昭和五十七年 新しい男女の文化を問う
- ・昭和五十八年 仏教書フェア
- ・昭和五十九年 記号論の現場

。同年 中世から近世へ

。昭和六十年 ニューサイエンスブックフェア

。同年 暮らしの文化人類学

。同年 東洋思想の潮流

。昭和六十一年 時代を哲学する百冊の本

。昭和六十二年 精神分析フェア

。昭和六十三年 教育書フェア

またこの間何回か専門書復刊本コーナーを設けた。特に記号論・ニューサイエンス・仏教書・教育書のフェア等は、売上の的にも好結果をおさめている。

(d) 顧客のニーズによる変化 このようにフェアを数多く実施した中でここ数年特に目立った動きを示している商品群として東洋思想がある。昭和六十年夏に「東洋思想の潮流」というフェアを行ったところ大きな反響を呼び、その後安岡正篤の著書が相次いで発行され活気を呈した。八重洲ブックセンターの顧客は三十代後半から五十代半ばが中心であり、現在においてもミニコーナーとして展開し、売上に大きく寄与している。

三 これからの人文書販売に関する考え方と課題

① 読者のニーズと思想の新しい動向にアンテナをはってゆきたい。古典思想もかつては現代思想であったように、その時代の歴史の中で諸問題と積極的に取り組み思索する事が思想であるとするならば、その時代を反映すべくテーマが誕生する。そのような動きより早くキャッチして読者に対する情報提供を行いたい。

② 専門書店としての品揃え——開店より一貫して打ち出してきた専門書中心の品揃えは今後も引き続き行ってゆきたい。一時期「商品回転率を引き上げるため低回転の商品は削ったほうが」との声もあったが、現状のままで行く事に落ち着いた。しかしながら人文、社会科学系図書は、常備の選択を基本的に全書仕入れる前提で行っているため、八重洲ブックセンターの坪数をもってしても、棚、ストック共に飽和状態であることは間違いない。棚卸しのお手伝いを頂いた出版社の方々は、あまりのストックの多さにあきれた方も多いはずである。しかし店頭には並ばなくとも問い合わせに対しての対応はしておかねばならない。

また人文書においては昨年人文会二十周年を記念して発行された『人文科学の現在』がある。これは第一部と第二部を合わせて三千五百点の基本図書が紹介されていること、また現在話題となっているテーマを二十本掲載しており専門の商品知識が必要な人文書をよりわかり易くするための努力がなされている。この試みは非常に大きな意味をもつ。それぞれの出版社が自社の本のみでなく人文書全体の充実を計ろうとする意欲が感じられた。八重洲ブックセンターとしても活用させて頂きたいと思う。

③ 販売員の養成——もう一つ大型専門書店に重要な項目として商品知識の向上がある。現在八重洲ブックセンターは基本的に一つのジャンルに対して二人ないしそれ以上の担当者をつけている。しかしながら、個々の商品知識には大きなバラツキがある。特に人文・社会科学関係の書籍については、問い合わせが多く読者に対して正確な応答を要求される。八重洲ブックセンターでは商品知識をつけさせるために一つの試みとして担当分野を中

心として（年次の高い者は他の分野も含む）一枚の用紙に数冊の書名、出版社を書き出し、テストを行っている。効果測定はともかく社員への動機づけとはなっているようである。しかし商品知識をつけると同時に棚が画一的にならぬように配慮する必要がある。特に他ジャンルとの境界設定がむずかしく、分類がいくつかに跨がることの多い人文書についてはジャンル間での調整が重要となってくる。

以上、人文書の八重洲ブックセンターにおける十年の流れを簡単に振り返ってみたが、これからの課題も多い。八重洲ブックセンターはやっと人文会の歴史の半分にたどりついたにすぎない。今年から再び初心に戻り、読者あつての書店である事を再認識し、サービス・商品知識・品揃えの充実を計るべく努力をしてゆきたい。

人文会の皆様にも何卒これまで以上のご協力・ご支援をお願いして私の拙い文章を終わらせていただきたいと思います。

図書館流通の問題点

学校図書サービスをつくって今年は二十九年目、TRC（図書館流通センター）の方はできてから十一年目を迎えることになる。

だから、ときに図書館流通の専門家のように思われてしまうことも多いのだが、考えてみると、いったい図書館流通なるものにどれほどの専門度が確立しているのかは、はなはだ疑問でもある。少なくともわれわれ自身、自分達で採点してもあまり良い点数はつけ難い。図書館の方からみたら多分もっと低い点数だろう。

そのせいで、こういう一文を書くことになるとうし

（株）図書館流通センター
代表取締役
専務

石井 昭

ても、かくの如くうまくいっているという話にはならない。むしろ、なぜこうもうまくいかないのか、というようなグチになりがちである。そこところはお許しを頂きたいと思う。

学校図書サービスは児童書の版元の応援で始まった。個人的な理由でしかないけれども、もし資金があればやはり普通の書店をやったと思う。いやもっと別のことをしていたかもしれない。とにかく就職をしくじった上に勘当同様の身の上だったから、そのときは何が何でもこ

れをやるしかなかった。

幸い家内が児童図書出版協会に勤めていて、当時の岩崎徹太会長に可愛がられていたこともあって、児童書の版元何社かが無担保で商品を貸してくれた。いわゆる有るとき払いの催促なしという有難い取引きで、やることは学校図書館への巡回販売である。

この巡回販売そのものも既に何年も前から何社かの版元の販促手段として定着していたから、われわれのやったことはそのコピーである。ところがこれが存外当たったのである。見本を持って客のところへ行く……という古風な売り方だけで、一年目の売上が年に六千万円、二年目には一億円を越えている。その頃はまだ年商一億というのは小売業の一つの目標で、少しばかりの資金で書店を開いていたらとうてい実現していなかった金額だと思ふ。

仕入れは版元から直接もらっていた。学校図書館というのはその頃から年一回か二回のまとめ買いで、しかも商品はほとんどシリーズ化されているから、売り手にとってはまことに都合がよい。今になって、そういう売り方を学校図書サービスが始めたかのようにいわれることが

あるが、そんなことはない。もともとそういう市場だったのである。シリーズで作るのはたしかに版元にちがいないが、それを好んで受入れる条件が市場になれば、そんなことが長続きするわけがないと思う。どんな買い手にせよ売り手の自由になるほど資本主義は甘くはないだろう。

とまあここまででは好運だけの商売で、専門とかノウハウとかのレベルではない。

しかしながら、こういううまい話が成立するのはせいぜい初めの二、三年である。三年目頃から取りものがぐんと増えた。限られた何社かの商品で売り続けるのは限度があるということもある。お客と親しくなるにつれこちららが便利屋化していくこともある。しかし何よりも最大の原因は、書籍という商品の多様さにあるだろう。市場に合わせていくら商品を絞っても、遂に絞りがきれないところが書籍の本来の商品特性なのであり、本屋の看板を掲げた以上それから逃がれられないのだ。

もっとも初めのうちは多寡をくくっていた。売上げが少しでも増えるのを歓迎する節すらあって、神田村を現金を持って商品調達に駆け歩いた。それがとうとう行き

詰まったのは、やはり資金繰りと商品調達のコストパフォーマンスの悪さである。

どうにも困っているのを見かねてポプラ社の田中治男氏（現社長）が東販に紹介してくれた。当時の東販の都内販売部長は清水平次郎氏である。清水さんは意外にもあっさり承諾してくれたものの、一つだけ注文がついた。「学校図書サービス」という名前は具合が悪いというのである。さすがに社名を変えろとまではいわれなかったが、取引口座名として「石井書店」といういかにも普通の本屋らしい名前がつけられ、それは今でもそのままである。そしてそのことはいまだにわれわれの立場を多少複雑なものにしている。

まあそれはともかく、それからの東販との関係も平坦ではなかった。その原因はおおむねこちら側にある。

取次がなぜ薄いマージンで成り立つかといえば、一定の取引方法を頑なに守り極力例外を作らないからである。たとえばある一つの取引きの採算が合うとしても、そのことが全体のシステムに与える影響を考えれば、システムはずれや応用動作は嫌われる。多くは知らないがそういう点では東販は特に保守的なのではないかと思う。それ

は東販の方針なのであり、とやかくいうことではない。だいいちそれだから収益力も他取次より格段に良いのだと思う。

取次の業務のなかでは、図書館への流通はほぼ全量が注文扱いで流れるという一点だけでも、もともと応用動作である。本来の取次業務を考えるなら、委託制と店売りがうまくその機能を発揮し、若干の補充や客注という補完機能で市場が満足し、全体の返品率が低く納まっている状態を理想とするのではなからうか。現在がとてそんな状態とはいえないにしても、少なくともそんな状態を作ろうと努力しているようにみえる。それが出版流通の基本動作だからだろう。

東販との取引が始まってまず起った最大の問題は、巡回商品の品切れだった。ご承知のように、学校図書館への売り込みは一学期が大ヤマである。なかでも五月の後半から六月いっぱい、の二ヶ月足らずではば一年分を売り切ってしまう。版元の巡回や取次の展示会もこの時期に集中する。

東販の場合は、この時期だけ臨時の出荷場をつくって対応していた。本来なら客注の形で流れるのだろうか、

業務の合理化と納期の短縮のために、あらかじめ特定の商品在庫をつくるのである。商品が児童書のセットものに限定され、巡回スケジュールがわかっているから、これは良い方法だと思われるのだが、実際には案外うまくいかない。日常業務の枠外だから、担当者の努力の割には品切れが多くなってしまふのだ。取次のこの手の応用動作はどうもおしなべてうまいとはいえないが、特にわれわれがこの在庫を利用するようになって、混乱の極という感じになった。

学校図書館の納品は、買い手の事情で夏休み前に納めるという約束で売ることが多いのだが、品切れのために納品不能になった額が、学校図書サービス一社で一億円を越えてしまったのである。はっきりは覚えていないが、年商がまだ十億円足らずの頃の話である。これでは何のための臨時措置だかわからなくなるし、だいいちこういう状態なら文句をいうのは図書サービスだけではないだろうから、無論東販でも問題になった。

原因は単純である。注文品に対応するのに事前に在庫をつくるなら、何がいつどれだけ動くかという予測が必要である。当然予測そのものはあるのだろうが、それが

良くないのである。こういう予測は恣意的なものは通用しない。あくまで客観的な理由をつみ上げておかないと、ときにはかえって混乱の因になる。客観性のある理由の基礎をつくるのは顧客情報である。それがかけているのが根本である。

考えてやったことではないけれども、学校図書サービスを始めたときから、過去の納入本リストを顧客毎に作っていて、それから逆算して、おすすめ本リストを顧客サービスにしていた。図書館の蔵書を調べて欠本リストを作ったり、分類ごとに基準に足りない部門の本をすすめたりもしていた。

そんなことは、ちょっと熱心な書店なら誰でも個々にはやっていたのだろうが、残念ながらそれが肝腎の取次の臨時在庫に反映していないのである。

たまたま図書サービスは取引校数がずば抜けて多い。ならば図書サービスの顧客情報を基に、初期在庫や補充数を管理できないか、と考えたのが、当時の書籍調整課長の関根登氏（現専務）である。結局、図書サービスと児童書版元が共同出資して在庫管理兼出荷会社（株式会社図書流通）をつくり、東販の臨時業務をそっくり肩替

りして今日に至っているが、出発時点から毎日の出荷内容に磁気テープで東販に渡すことなど、東販としては異例の措置だったようである。これは関根さんの大努力にも負うのだけれど、よく考えてみると、全体システムとしては消化しにくい小部分を、あえて自社に呑み込まなという点では、いかにも東販らしい決断ともいえる。

これは大きな例だが、この種の調整は図書サービス、TRCと東販の間では無数に行われてきたし、現に今も行われている。

そういう調整を行いながらつくづく考えてしまうのは、注文という形の商品調達が多かれ少なかれうまく流れない実態は、年々大きくなっているということである。そして多分、それは出版流通システムそのものの問題なのであって、個々の人間的努力の不足や、果ては誠意の有無などで論じてみても、いかんともし難いということである。現場は現場なりに努力しているし、知恵も絞っている。しかし根はもつとずっと深いところにあるのだ。

すでに多くの識者が指摘しているように、その根が委託制度に関わるらしいことは私にも納得しやすい。その

手直しのために、部分的に買切制を導入しようという取次協会の考えも理解できる。それはそれでとにかく推進するだけの価値はある。にもかかわらず、ここまで肥大している不便さが、それでそう減ると思えないのである。

流通システムの問題が一片の議論で済むとは無論考えていけないけれども、こういうこともある。

例えば、定価千円の本を、棚から抜いても、店に取り寄せを頼んでも、千円は千円である。ところが売り手の方からみれば、棚を占有するコストを考慮に入れても、商品調達のコストはかなり違うと思う。だから売上げの内容が客注ばかりに片寄ると、収益が悪くなるのである。でき得るかぎり棚を整備して、売上げの内容のバランスを整えなくてはならない。いきおい、リスクの小さい大版元、有名著者、大宣伝中の商品を多く持たたい。その方が問題解決の早道である。金太郎飴などと馬鹿にされてもである。

この場合、客注の位置づけはいわゆる必要悪である。商売上やめるわけにはいかないものの、あまり増えても困ることになるから、全体の売上げのなかで、でき得る

かぎりその比率を低くする努力が、経営上必要になつてしまふのだ。

考えるべきことは、流通全体のシステムが完全無欠ではなく、もともとそういう必要悪付きの仕組みだったということではないだろうか。

今日からみても、委託制度というのはなかなか味のあつた知恵である。多品種で個性的な（従つて代替し難い）人間の思想を、モノの形で流通させようとすればするほど、必要なのは大スペースである。小資本小スペースで経営を維持しようとすると、むしろ商品を一定期間で順ぐりに交替させる方がよい。いろいろな商品を見て買いたいという買い手へのサービス、という点からベターである。

もっともこういう発想は売り手のものではない。大量生産と大量販売をシステム化しようとする、作り手の端促すべからざる知恵である。

委託制度の最初がそうであつたように、この仕組みは雑誌にうまく適合する。店頭での選手交替と同時に、雑誌はほとんどその商品価値を失うからである。が、書籍にはいまひとつなじみにくいところがある。店頭から消

えても、書籍には再登場の必要があるからである。だから書籍にはどうしても雑誌には不要な補完機能をつけておく必要があつた。それが客注というシステムで、これは本来あくまでも脇役である。それも目立たなければ目立たないほど喜ばれる脇役なのである。もしそれが、世の中の変化につれて、将来準主役ぐらゐになるかもしれないという予測が流通側になれば、全体のシステムはもう少し違つた形で発達したかもしれないと思ふ。

とにかくその点を積み残したまま、委託制度は出版流通の太い柱の一本となり、出版という仕事は大量生産と大量販売を可能にし、つまりは産業化してきたと思ふ。

本来は補完機能であつた客注が、なぜこうも肥大するのかは、誰もが指摘するように、やはり書籍の商品特性とそれに対応するマーケティングの難しさにあるだろう。

書籍が個性的な商品かなどということをし、いまさらのやうにいうつもりはないけれども、例えばわれわれの仕事の一つであるTRCマークについてみると、市販される年間三万二千件ほどの新刊書籍のなかのおよそ一万件強は、初出の著者によって書かれている。書籍の世界では、毎年一万人以上の新人著者が出現しているのである。

単純に比較はできないまでも、一兆円に満たない売上げ規模の商品生産では、これは格別に多いアイテム数ではなからうか。書籍とはまるで人間そのもののように多様なものだと思はざるを得ない。

同じことは、買い手の方にもいえると思う。これもわれわれの貧しい例でしかないのだが、前述した「図書流通」の例でいうと、現在約一三五八種類（タイトル数は約二万件）のセット商品を在庫しているが、年間の出荷額は総額で四十億円足らずである。さらに数量分布で見ると、四桁の出荷数になるのは常に十指に満たない。多くは二桁か三桁の前半の出荷数であり、平均は一五〇セット前後になる。これで全国一万校近い学校販売をカバーしているのだから、コストパフォーマンスはさして良いとはいえない。しかし注目したいのは、在庫のなかで出荷数がゼロというケースは、過去の十五年間にただの一度もなかったことだ。学校図書館という狭い市場にだけついて考えてすら、買い手の好みは予想外に多様化している。一般に児童書はロングセラー（部数が多いという意味ではない）だから、いったん商品在庫を始めたなら、アイテム数は限りなく拡大する傾向を持ってしまう。

「図書流通」のケースは、ケースとしては特殊だが、書籍の持つ性格としては普遍的だと思う。

それなのに、本来の機能が補完機能という位置にあるから、根本的な対応策はとられ難い。何よりもこの部分のコストパフォーマンスは多分取次でも良くないだろうから、思いきった前向きな投資を誘発しないのではないかとと思う。そういうことが因となり果となって複雑に関わり合いながら、結局は、買い手にとって不便な流通をつくっているのではないか。

ここまで書いてきて、実は買い手といってもさまざまあることを考えないわけにいかなくなった。例えば、CVストアの棚で満足するのも買い手である。現在の出版流通機構から考えれば、CVストアほど巧みにこのシステムを理解している売り手は考えられないからである。そしてその意味で、図書館は最もシステムに乗り難い買い手だろう。

取協試案の買切制の提案は、ひとつの交通整理にはなり得ると思う。が、買切制を考えるならやはり注文、特に客注が買切りだということを再確認するべきだと思う。図書館に限らず、客注とはすでに半ば取引が成立して

いる場合である。相手が誰であれ、読みたがっている買い手を、今のように待たせておいて良いはずがないということを、出版流通の信頼のためにもっと真剣に考えなければいけないし、そのための思いきった投資こそが、緊急に必要だと思う。

図書館への流通を考えると、どうしても避けられないもう一つの問題は、図書装備と書誌データ作成の問題である。

ご存知のように、図書館は本を購入してもそのままでは使えない。当たり前のことだが、本がいくらあっても、それだけでは図書館とはいえない。図書館とは機能なのである。それは一種の巨大な記憶装置であり、記憶は必ず憶い込まなければならないから、図書館はそのためにシステム化されている。そのシステムをごく単純化して考えると次のようになる。

第一に、図書館が受け入れる資料は必ず一連番号によって個別化される。

第二に、資料は一定のルールによって配架される。

第三に、資料検索の手がかりとして目録が作られる。

第四に、利用後の資料が必ず復元されるように、利用者もまた何等かの記号によって個別化される。

このシステムの原形がつくられたのは非常に古い。しかしもうお気付きのように、この形はコンピュータの仕事となじみやすいのである。図書館のコンピュータが始まったのはたかだか十年程前のことでしかないが、それがまたたく間に拡がってきたのは、まずこんなところに原因があると思う。

図書館が本を買ってからシステムとして立ち上げるまでの仕事、あるいは買った本をシステムに組み入れる仕事は、本来図書館の内部業務である。それが最近のように外部に委託されるようになったについては、それなりの理由がある。一つには、何ととっても図書館側の人手の問題である。図書館を主宰する地方自治体の多くは人件費を増やしたがない。したがってほとんどの小、中学校図書館にはいまだに専門職の配置がない。公共図書館は近年量質ともに拡大しているが、十分な人員配置は希である。だから行政的見地からの外部委託が増えるのである。

しかしさらに大きな理由もある。個々の図書館が内部

業務として考えるより、外部委託の方がコストパフォーマンスが良いという点である。これは、近頃はやりの民活とかの意味ではない。例えば目録のためのカード一枚書くにしても、同じ本のカードを個々にあちこちで書くより、一ヶ所で作ったものをコピーした方が合理的というほどの意味である。

この傾向にコンピュータの導入が益々拍車をかけた。書誌データの作り方が、カード目録の時代より、ある面ですっと専門的になってしまったためである。これは図書館のカタログの問題であるより、コンピュータそのもののせいである。人間ならば容易に理解しクリアできる程度の小さなミスでも、現在のコンピュータは理解できない。つくられるデータはコンピュータがクリアできるレベルまで詳細に整合される必要があり、そのために個々の図書館でのデータ作成は非効率なのである。さらに、図書館が図書館同志の連携によってそのサービスレベルを上げようとすると、この問題はいつそう顕著になる。ネットワーク内部の書誌のデータが不整合だと、ネットワークは機能しないからである。

現在TRCは、書籍データセンターから委託を受けて

作成する新刊データ（標準マーク）分を含め、年間約七万件のマークデータを作成し、八百万件近いデータを図書館に販売している。その大半は磁気テープもしくはフロッピーディスクを媒体としているが、今年四月以降は、オンラインによって電送する方法も加わる予定である。

マークの用途は、図書館の目録用だけではない。図書館の選書から発注、受注、集荷から装備納本に至るまで、一貫してこのデータが使われている。

ところが、マークが取次別に何種類か作られ、しかも同一本のデータを相互に確認し合うユニークキーがそれぞれ異なるために、図書、装備、データは取次毎に一元化されてしまう傾向にある。

このことから、図書館納本の仕事は取次のシェア争いに巻き込まれ易く、それが図書装備のコストを極端に圧迫する原因につながっている。

図書装備のコストのなかで最も大きいのは人件費である。いきおい多数のパートタイマーの労働力に頼ることになる。労働環境も良いとはいえない。われわれが最も頭を痛める部分である。もしこの仕事が社会に定着するとするなら、今のままで定着するのは何としても困ると

思っている。悪貨は良貨を駆逐しやすいからである。やはり、胸を張って金をもたらえる仕事にしなくてはならない。

ずいぶん減ってきてはいるが、今でも、装備は本を売るための無償のサービスだと思っている人が結構いる。前述したように、図書館は本を買ってもすぐにそれを使うわけではない。図書館を一つのシステムとして考えると、本はそのシステムが持つデータであり、全体の一部分である。データをシステムに組み込んで、はじめてシステムの一部分である本も使用可能となるのであるが、そのためにはそれなりの加工が必要であり、それが装備である。良い加工も悪い加工もあり、システムの機能が高度で仕様が複雑であれば、その費用も高くなる。現在その幅は一冊あたり二百円から千五百円くらいまであり、公共図書館の購入図書の平均単価が千三百〜四百円見当であるから、無償でサービスできるような範囲の金額ではない。

因みに学校図書サービスの場合、およそ七十億円の納入図書のために十億円の加工費用がかかっているが、これは学校図書館との取引が多く、加工が比較的簡単だからであって（ただし一件当たりの取引額が小さいから営業とか管理上の手間は大変である）、TRCの場合は、三十六億円の図書の加工に九億円の費用がかかっている（無論この金額は初期のマーク作成費を含んでいない）。これは図書の流通マージンの幅を軽くオーバーする額であり、従って最終の販売価格は加工売上をふくんで四十二億七千万円となるのである。図書の定価から考えると、この販価は一一九％となるが、装備費（データ代を含む）を差引くと、荒利は十七％程度である。そのなかから二億六百万円（五・七％）の営業費を書店に支払うと、残りがTRCの運営費ということになる。（六三年六月三〇日決算の実績数字である。）

図書サービスの場合でも、最終販価は約七十五億円であり、定価の一〇七％を越えている。いずれにしても図書館への納本は、本そのものの値段ではとうてい納まらないだけの加工費を必要としている。

加工費を図書装備費とか書誌データ費とかの費目にして認める傾向は、自治体のなかでも拡がりつつあるが、まだまだ全体の認識には至っていない。これは、定価という考え方にも多少関係があるかもしれない。定価はそ

れを値引きすることの防止にはおおいに役立つけれども、何等かの付加価値をつけて販売するときには、かえって説明が通りにくいことが多いからである。その意味で、本の宅配システムの料金がどこまで社会的認知を得られるかは大変重要だと思う。

ついでに云えば、加工費を図書代金と別立てに考えるべきことと、図書の流通業務と加工作業を切り離すということは全く別の問題である。先にも触れたが、マークデータを中心に物流と加工は一元化しつつある。それは全体のコストを引き下げるために必要な条件なのであり、競争下においては、好むと好まざるとにかかわらず、コストの低い方が有利だからである。

マークデータの作成業務にせよ、そのデータを使っての図書の装備の作業にせよ、業務の大半は、細分化された人的作業の集積である。ほんのわずかな手抜きや見逃しでも、作業全体を滅茶苦茶にしてしまう危険があり、事実一〇〇%完璧な仕事はもとも期待できない。大量の作業をこなせば、常に何パーセントかの事故は発生する。納期に縛られながらその事故率をいかに引き下げるかがこの仕事のもっとも核心にふれる技術といえるし、

それが利益につながる。だから熟練度はもちろんだが、事故回避のノウハウもまた重要なのである。そしてその種の仕事もまたコンピュータの得意技であり、ここでもコンピュータの業務への介入が必要になりつつある。

与えられた紙数が既につきているので多くは語れないが、図書館への流通はまだ未成熟であり、かなりの開発や投資を必要としている。が、それは出版産業にとって必要だと思ふ。なぜなら、図書館は本質的に多品種少量の買い手なのであり、そういう買い手のための合理的なシステムは、現状では未発達であり、しかも、それがために多くの小版元や無名著作物は活躍の場を制限されているからである。しかし出版の本質を考えれば、こういう状態の行き過ぎは、必ず全体を衰微させる傾向を生むと思う。誰もが自由に書き、自由に出版でき、その流通を阻む条件はできるだけ少ない方が、産業としての出版も展望を広げ得るのではないか。少数の巨大出版のみが生き残るという図式は考えにくく、大はあくまで無数の小の上に成り立つのが出版だと思っている。そしてそのためには図書館のネットワークは必要である。

人文会復刊書フェア開催に当って

販売企画委員会

竹内 康一

(東京大学出版会)

人文会は、人文科学・社会科学に関する図書の出版を主体として、地道な出版活動をつづけている版元二一社の集まりです。専門書を中心に出版を心がけている私どもにとって評価の定まった書籍を思うように再版していくことができにくくなった昨今の出版事情はまことに残念なことでもあります。

そこで、このたび本会の創立二〇周年に際しまして、人文会と研修会をもっていた書店さんの強力且つ熱意のあるご協力を得まして、各社単発的には復刊のなかなかむずかしい、現代の古典ともいべき良書六四点

六七冊を一举復刊することとなりました。このチャンスをお見逃しなく貴店におかれましても店頭陳列いただけますようお願い申し上げます。

〔復刊書一覧〕

マカレンコ	愛と規律の家庭教育【新装版】	一三〇〇円	青木書店
クルプスカヤ	家庭教育論【新装版】	一三〇〇円	青木書店
戸坂 潤／芝田進午解説	科学論【新装版】	一五〇〇円	青木書店
戸坂 潤／小川晴久解説	認識論【新装版】	一五〇〇円	青木書店
真下信一	学問・思想・人間【新装版】	一五〇〇円	青木書店
井上正蔵・小西悟他訳	マルクス全詩集	八〇〇〇円	大月書店

- モロク編 高橋勝之訳 パリ・コミュニケーション
三〇〇〇円 大月書店
- スミルノフ・ザイツェフ 東京裁判 三三〇〇円 大月書店
- 川上洗・直野敦訳 栗屋憲太郎解説 二四〇〇円 御茶の水書房
- ヘラー 安世舟訳 ドイツ現代政治思想史 二六〇〇円 御茶の水書房
- A・シュッツ 現象学的社会学の応用 二二〇〇円 紀伊國屋書店
- 桜井 厚訳 基本概念と生活史(附) 二〇〇〇円 勁草書房
- エックルス 脳と実性 二〇〇〇円 勁草書房
- 鈴木二郎他訳 野良に叫ぶ——渋谷定輔詩集
二〇〇〇円 勁草書房
- 渋谷定輔 文学理論と構造主義 三五〇〇円 勁草書房
- 磯谷 孝訳 カウントダウン・ゼロ 二二〇〇円 社会思想社
- T・サッファール他 ドイツ総決算 三五〇〇円 社会思想社
- グロセール 山のこころ 一八〇〇円 春秋社
- 高橋保行 シェイクスピア最後の夢 一七〇〇円 春秋社
- 桜井徳太郎編 シェイクスピア最後の夢 一三〇〇円 晶文社
- F・イエイツ カリガリ博士の子どもたち 三五〇〇円 晶文社
- S・S・プロウアー ブレーリス音楽論 三九〇〇円 晶文社
- P・ブレーリス 徒弟の覚書 二〇〇〇円 誠信書房
- S・フィッシャー 求められる愛 一八〇〇円 誠信書房
- S・アリエティ他 無意識の探求 二二〇〇円 誠信書房
- R・エヴァンズ ユングとの対話 四八〇〇円 創元社
- 横田健一 白鳳天平の世界 一八〇〇円 創元社
- 三杉隆敏 海のシルクロードを求めて 一六〇〇円 創元社
- 周達生 中国食物誌 五〇〇〇円 筑摩書房
- 中国料理あれこれ
- 木下順一・江藤文夫 中江兆民の世界
- 丸山眞男他
- 小津次郎 エリザベス朝演劇集 六〇〇〇円 筑摩書房
- 小田島雄志他訳 日本社会主義の思想 三八〇〇円 筑摩書房
- 松沢弘陽 魏晉學術考 三五〇〇円 筑摩書房
- 狩野直喜 西漢學術考 四〇〇〇円 筑摩書房
- 狩野直喜 中世文学の世界 一四〇〇円 東京大学出版会
- 久保田淳 アイリッシュ・パワア 中世に生きる人々 一六〇〇円 東京大学出版会
- 三好洋子訳 桜井好朗 神々の変貌 二八〇〇円 東京大学出版会
- 永原慶二編著 鹿野政直 日本歴史家 二八〇〇円 日本評論社
- 外間守善編 伊波普猷 人と思想 二四〇〇円 平凡社
- 飯倉照平編 南方熊楠 人と思想 二四〇〇円 平凡社
- M・ブーパーノイマン カフカの恋人ミレナ 二四〇〇円 平凡社
- R・アドラー ニューヨークタイムズの日 二四〇〇円 平凡社
- W・ランガー ヒトラの心 二四〇〇円 平凡社
- 山田憲太郎 スパイスの歴史 一九〇〇円 法政大学出版局
- 加茂儀一 騎行・車行の歴史 一九〇〇円 法政大学出版局
- 本多顯彰 シェイクスピア四大悲劇の鑑賞 一八〇〇円 法政大学出版局
- 相馬黒光 黙移(明治・大正文学史回想) 一九〇〇円 法政大学出版局
- ヴェド・メータ ハエとハエとり壺 二〇〇〇円 みすず書房
- H・アーレント イエルサレムのアイヒマン 三三〇〇円 みすず書房
- J・スタイナー 青鱗の城にて 一六〇〇円 みすず書房
- C・S・ルイス 文化の再定義の試み 二八〇〇円 みすず書房
- H・フォション 愛はあまりにも若く 二〇〇〇円 みすず書房
- 至福千年

J・ルノワール	ジャン・ルノワール自伝	三〇〇〇円	みずず書房
W・C・デメント	夜明かしする人、眠る人	一八〇〇円	みずず書房
N・コールド	アインシュタインの宇宙	二八〇〇円	みずず書房
G・タルド	世論と群衆【新装版】	一八〇〇円	未來社
桜井好朗	中世日本人の思惟と表現	三五〇〇円	未來社
ノイローレ	第三帝国の神話	二五〇〇円	未來社
C・シュミット	政治的ロマン主義	一八〇〇円	未來社
M・モース	エスキモ―社会	二〇〇〇円	未來社
廣未保	近松序説【増補版】	二八〇〇円	未來社
西郷信綱	国学の批判	二〇〇〇円	未來社
守屋俊彦	記紀神話論考	五八〇〇円	雄山閣
地租改正資料刊行会編	明治初年地租改正基礎資料 セット定価九〇、〇〇〇円	全4巻	有斐閣
岸 俊男	京都と木間―よみがえる古代史―	一八〇〇円	吉川弘文館
日崎徳衛	王朝のみやび	一八〇〇円	吉川弘文館
田原嗣郎	赤穂四十六士論 ―幕藩制の精神構造―	一八〇〇円	吉川弘文館

〔弘報委員会より〕

○「昭和から平成へ」「リクルート事件」「消費税導入」―波乱の一九八九年のスタートになりました。十年後には、どのような角度から振り返ることになるのでしょうか。「特集八重洲ブックセンターの十年」から、一九七八年当時のことが少しずつ思い出されてきました。

○今回は、「人文書講座」は休載いたしました。次号五六号には「フランス革命二〇〇年」を予定しております。ご期待下さい。

○次号は、五月発行の予定です。

一九八八年 人文会各社の受賞図書一覧（アイウエオ順）

- ・江馬 務賞
- ・中山千代著『日本婦人洋装史』（吉川弘文館）
- ・角川源義賞
- ・太田静六著『寝殿造の研究』（吉川弘文館）
- ・芸術選奨文部大臣賞
- ・川崎寿彦著『森のイングリッド』（平凡社）
- ・講談社ノンフィクション賞
- ・三神真彦『わがまゐいっばいの名取洋之助』（筑摩書房）
- ・サントリー学芸賞
- ・大津定美著『現代ソ連の労働市場』（日本評論社）
- ・笠谷和比古著『主君「押込」の構造』（平凡社）
- ・佐々木幹郎著『中原中也』（筑摩書房）
- ・鳴海邦規著『アーバン・クライマクス』（筑摩書房）
- ・東京海上各務記念財団優秀著書
- ・北山修著『心の消化と排出』（創元社）
- ・日刊工業新聞社技術・科学図書文化賞優秀賞
- ・宇敷重広著『フラクタルの世界』（日本評論社）
- ・佐藤七郎著『細胞進化論』（東京大学出版会）
- ・日経・経済図書文化賞
- ・伊藤元重ほか著『産業政策の経済分析』（東京大学出版会）
- ・宮本又郎著『近世日本の市場経済』（有斐閣）
- ・日本印刷産業連合会会長賞
- ・野崎昭弘著『数学的センス』（日本評論社）
- ・日本児童文学会奨励賞
- ・佐藤宗子著『八家なき子』の旅』（平凡社）
- ・谷口悦子著『まど・みちお 詩と童謡』（創元社）
- ・日本翻訳出版文化賞
- ・A・コイレ著／管谷暁訳『ガリレオ研究』（法政大学出版局）
- ・日本翻訳文化賞
- ・サルタ著／森岡恭彦訳『生きる権利と死ぬ権利』（みすず書房）
- ・S・A・ハンデルマン著／山形和美訳『誰がモーセを殺したか』（法政大学出版局）
- ・野間児童文芸賞
- ・谷川俊太郎著『はだか 谷川俊太郎詩集』（筑摩書房）
- ・発展途上国研究奨励賞
- ・絵所秀紀著『現代インド経済研究』（法政大学出版局）
- ・ピーコ・テッラ・ミランドラ賞
- ・河島英昭訳『ウンガレット全詩集』（筑摩書房）
- ・毎日出版文化賞
- ・高柳先男著『ヨーロッパの精神と現実』（勁草書房）
- ・山口瑞鳳著『チベット上・下』（東京大学出版会）
- ・横井清著『的と胞衣』（平凡社）
- ・真壁仁・野の文化賞
- ・大滝十二郎著『近代山形の民衆と文学』（未来社）
- ・マグサイサイ賞（フィリピン）
- ・最高栄誉賞（インド）
- ・福岡正信著『自然農法わら一本の革命』（春秋社）
- ・南日本出版文化賞
- ・芳即正著『調所広郷』（吉川弘文館）
- ・山川菊栄記念婦人問題研究奨励金受賞
- ・有賀夏紀著『アメリカ・フェミニズムの社会史』（勁草書房）
- ・労働関係図書優秀賞
- ・西谷敏著『ドイツ労働法思想史論』（日本評論社）
- ・仁田道夫著『日本の労働者参加』（東京大学出版会）
- ・歴程賞
- ・川田順造著『声』（筑摩書房）

人文会会 員 名 簿

(〒113 文京区本郷 5-32-21 みすず書房内)

1989. 2. 現在

	社 名	担 当 者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町 1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	橋本 盛作	102	千代田区九段北 1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	439-0125	439-1094
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	814-6861	814-6854
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	813-8105	813-9061
幹 事	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	255-9611	253-1384
	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	255-4501	255-4506
幹 事	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	946-5666	945-8880
幹 事	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	269-1051	269-1092
	筑 摩 書 房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町 2-8	291-7651	295-0220
幹 事	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1	811-8814	812-6958
幹 事	日 本 評 論 社	後藤 光行	170	豊島区南大塚 3-10-10	987-8621	987-8590
	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	813-3981	818-2786
幹 事	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 Kビル	265-0455	263-9333
幹 事	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	814-0131	818-6435
	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	814-5521	814-8600
	雄 山 閣 出 版	武 一雄	162	新宿区白銀町 20	266-8481	266-8444
	有 斐 閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	265-6811	262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎竹内 ○氏家 西谷 辻村 阿部

弘 報 委 員 会 ◎澤畑 ○土屋 古川 橋本 萬洲

調査・研修委員会 ◎市川 ○武 原田 渡辺

20周年記念委員会 ◎濱地 佐久間 菊池

◎印は委員長 ○印は副委員長

目崎徳衛 著

数奇と無常

王朝のみやび

西行思想の中核であり、中世思想史のキーワードでもある数奇と無常。現代人の思想や感情に、忘れかけたものの回復を訴えてやまないこのテーマを、豊かにわかりやすく描き出す。〈新刊〉定価一八〇〇円

古今・伊勢・源氏や書跡・大和絵などを生み出した王朝文化の諸相を歴史的に解明すると共に、多彩な人間像を興味深く描く。

〈重版〉定価一八〇〇円

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2・電話03-813-9151

山と民具◎山の人の生業と生活技術
日本民具学会編・

●4000円

畑作の民俗◎日本の基層文化を求めて
白石昭臣著・

●3500円

焼畑民俗文化論◎第三版出来
野本寛一著・

●17000円

縄文のムラと習俗◎考古学選書③
桐原 健著・

●3500円

古墳文化の風景◎著名古代遺跡ガイド
中村 浩著・

●18000円

雄山閣

千代田区富士見2/振替東京3-1685

藤原 彰・今井清一◎編
十五年戦争史
全4巻

① 満州事変

日本はなぜ戦争とファシズムの道へ

② 日中戦争

予期せぬ長期戦化とその実像を描く

③ 太平洋戦争

遅すぎた戦争終結の経緯を追求する

④ 占領と講和

新たな視覚から問題史的に解明する

各巻定価●2000円 [内容見本送呈]

青木書店 東京神田神保町1

実像
リポート
シングル
ウーマン

*

情景のなかの労働

内山 節著

四六判上製カバー付

一六〇〇円

山村や都市を舞台としてくり広げられ変容してゆく労働の姿に戦後史の一断面が浮かび出る。

国際女性学会シングル研究班著 一五〇〇円

女性たちの独身気分は、晴？ 曇り？ 女たちが自身によるシングルライフ報告。 [有斐閣選書]

東京・神田
神保町2

有斐閣

☎ 03-
265-6811

シェイクスピア のことば

S.ハッセイ／森祐希子訳 言語学的な観点を軸とし、言葉が劇中で生み出す効果を探る新しい試み▶4500円

ことばの働き テキスト構造についての8講

R.クワーク／池上嘉彦、豊田昌倫訳 現実のコミュニケーションの場で働くことばを平易に解説する▶2000円

楽園願望

M.ヤコービ／松代洋一訳 誰の心にもひそむ楽園願望の深層を乳児期の母子関係から読み解く快著▶2500円

紀伊國屋書店

本 店：東京都新宿区新宿3 ☎(354)0131
出版部：東京都世田谷区桜丘5 ☎(439)0125

大月書店

ベトナム戦争 の記録

20世紀後半を揺るがした
世界史の回廊、ベトナム戦争のすべて！

- 数百点の写真
- 正確な通史
- 豊富な解説と資料

永久保存決定版

厳選された数百点の写真と
最新の研究成果による通史、
貴重な証言、第一級の解説、
豊富な資料。他に類をみな
いベトナム戦争の集大成版
A4判 函入・120000円

東京都文京区本郷2-11-9・電話03(813)4651

本田和子 子別れのフオークロア

古代神話～映像まで母子の物語に
みる結合と分離の姿。1700円＋250

小川博司 音楽する社会

メディア／音楽／人間の変容と絡み
を解き現代像を示す。1800円＋250

D.ブルア／戸田山和久訳 ウィトゲンシュタイン

知識の社会理論 言語ゲームと人
文・社会科学をつなぐ。2800円＋300

T.イーグルトン／有満・高井・今村訳 ワルター・ベンヤミン

革命的批評に向けて 歴史の連続
性を爆破する試み。3000円＋300

東京文京 後楽2-23 勁草書房 振替東京
5-175253

御茶の水書房

あごら叢書

バルトク音楽論集

バルトク著・岩城肇編訳／定価3400円
今世紀最大の作曲家の一人バルト
クの音楽論を集成した話題の本。

御茶の水選書

現代資本主義のトポロジー

高橋洋児著／定価2000円

物象化論に独自の道を開いてきた著
者が、現代日本の社会状況に鋭く切
り込む会心の批判集・現代社会論。

病める日本をみつめて

——人間解放と宗教の再生——

ルベン・アビット著／定価1400円

アジアは日本が身を正すための鏡で
ある。非人間化した日本社会を凝視
し、アジア民衆との共生を模索する。

東京・千代田・九段北1-8-2 ☎03(265)5746

フリーダ・カーロ

生涯と芸術

H・エレラ 野田・有馬訳 愛と血と死と——。壮絶な運命と闘い、鮮烈な作品をのこしたメキシコ的美貌の画家の波乱にみちた生涯。 5800円

わたしたちの 小さな世界の問題

新しい教育のために

M・ローディ 田辺敦子訳 学校を内側から変えた、イタリアのある公立小学校の5年間の教育実践の記録。大反響をよんだ現代版『エミール』。2900円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255) 4501

復刊書・4点

ドイツ総決算

◆九四年以降のドイツ現代史
A.クローベル／山本光
三島憲一・相良憲一・鈴木直訳
四六判 定価三三〇〇円

カウントダウン ゼロ◆原爆兵士の黙示録

〇ケリー T・サツファ
I／春名幹男訳 (随頁)
四六判 定価二二〇〇円

政治思想論集

◆付カール・シュミット論
〇シュミット／宮本盛太郎・服部平治訳 (随頁)
四六判 定価三八〇〇円

隠れたる神

ハスカル・のパンセとラシーヌ
劇における悲劇的世界観の研究
L・ゴルドマン／山形頼洋・名田文全訳
(C)増入計22C
A5判 定価九八〇〇円

社会思想社

東京都文京区本郷3-25-13 ☎813-8105

カラー図説 記憶力

そのしくみとはたらき

パッドリー／川幡政道訳 最近の認知心理学の研究成果をふまえて、目撃者証言や記憶術といった人間の様々な記憶について豊富な図版をもとに解説。 3800円

ボディ・ランゲージ 解 読 法

アーチャー／工藤 カ・市村英次訳 ボディ・ランゲージに含まれる手掛りを解説し、他人の行動、感情の状態、関係性を推理、対人的感受性を高める書。 1800円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03-946-5666

吉本隆明

<信>の構造

<三部作>

③全天皇制・宗教論集成

天皇制が日本の歴史と民衆に与えた宗教的威力の根源を、自らの戦中体験と全思想を賭して解明する白熱の全論考。巻頭に今後の天皇制の存続を問う新稿90枚。 2400円

▶好評既刊

①全仏教論集成 2400円

②全キリスト教論集成 2400円

東京都千代田区外神田2-18-6 **春秋社** ☎(03)255-9611 振替東京8-24861

青年法律家協会
神奈川支部／編
好評発売中／◎定価1500円

悪徳商法にご用心

実績を持つ若手弁護士
が悪徳商法の手法を解
き明かす！

山田功男／著
好評発売中／◎定価1300円

激怒する農村

日本農業が殺されよう
としている。農民の怒
りをさけ！

日本評論社 豊島区南大塚3-10-10
〒170-0103 03-987-8611

創元社

中国の ランセツト

針灸の歴史と理論

B5判
定価8,000円



Jニードム 魯桂珍著 橋本・宮下訳
三千年の昔から中国の人々は麻酔を行ない、治療を試みてきた。天からの聖なる贈物「針灸は、いかに成立したのか。氣・経絡・サーカリアリズム・身体論など、膨大な資料を駆使して考察する。

大阪市北区西天満1-4-2
東京都新宿区山吹町334-11

■最新刊■
安岡正篤著
四六判／一六〇〇円

老荘のこころ

戦後の名著「老荘思想」を新訂し、関連二論文を加えた決定版。とかくある側面だけが強調されがちな老荘思想を、体系的に捉える。

秋山さと子著
四六判／一五〇〇円

秋山さと子の「女性論」

周囲からおしつけられた仮面をとれば、豊かな自己表現ができるのでは？ カウンセリング経験を基に、思い悩む現代女性を応援する。

東京・文京 小石川1-3 福村出版 電話(03) 813-3981

山口瑞鳳(東洋叢書3・4) 四六判／2600円・2800円
チベットの上下
☆一九八八年度毎日出版文化賞受賞
敦煌文獻など二次資料で描く、秘境チベットの歴史と文化！
辻井潤一・安西祐一郎(認知科学選書20) 四六判／1800円
機械の知・人間の知
「機械の知」の実現と「人間の知」の解明をめざす人工知能、認知科学の成果！二つの知の特質を明らかにしその乖離を埋める。
香山壽夫
B5判／20000円
多数の現地写真・未発表の図面・スケッチで形態論的特質を探る

東京大学出版会

113 東京都文京区本郷7 ☎03-811-8814

非売品

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印